「赤土色のスペイン」　弦書房　2008 年 9 月

スペイン在住３０余年、画家でありカンテ（フラメンコの唄）の名手、『ドン・キホーテ』全訳版の挿絵・装画を手掛けるなど多岐に制作を続ける著者が、スペインと日本を股にかけ、日西のフラメンコ！な日常、出会った個性的な人々、芸術への思い等々を辛口のユーモア溢れるエッセイで綴る。好評だった２つの新聞連載（読売新聞「赤土色のスペイン」、西日本新聞「人の上は空である」）をあわせ、さらにカラー口絵８８点を含む挿画多数収録。

あー堀越千秋が飛んでゆく　　2008.11.11 西日本新聞から
村田喜代子

このほど堀越千秋の『赤土色のスペイン』という本が出た。前に西日本新聞などに連載していたエッセイをまとめたものだ。新聞のときから読んで面白かったので、早く一冊にまとまらないかと待っていた。

　堀越千秋の文章というのは、ほとんど考えて書いていないんじゃないかと思うほど、放埒で、言いたい放題で、ひらめきが横溢して、うまい！一生懸命に考えて書くと、こんな

ふうには書けないのだ。どうしても綿密に書いてしまう。すると跳べない。地べたを這うような当たり前の文脈ができてしまう。

私などは文章を書くのはひたすら苦しくて好きじゃないが、堀越千秋は好きよりも何よりも、朝飯前で、しゃべるより楽しいのではないかと思う。書くことと生きることはリアリズムで、私が書くのが苦手なように生きるのも苦手の厭世主義者だが、堀越千秋は書くのも生きるのも、スペインの「カンテ」を歌うように何てことなくて自在なのだろう。

それで思い出すのは彼といったあれやこれやの旅の場面である。行った、と言っても二人で出かけたのではない。男女何人かの友達との旅だが、ことに印象深かったのは女友達と雲南へ行ったときだ。中国といっても雲南は辺境の地である。言葉も北京語と少数民族の言葉と、通訳が二人いるような土地だった。

それで用心棒、じゃない、頼りになる信頼できる男性の友人を誘うことになり、ちょうど帰国していた堀越千秋画白に声をかけた。名前だけの印象では女性と間違えそうであるが、スペインの放送局で歌ったら計器の針が振り切れたというくらいの大音声の持ち主で、容貌容姿も幅広の顔面、百数十センチはあるだろう胴回りといい、うってつけの人物だ。

絵描きは旅の友に口説きやすい。絵描きに行きませんかとさそったら、ふたつへんじでおうじた。昆明の空港に着いて待っていると、彼は東京からの飛行機でやってきて合流した。自他共に許す国際人の到着だ。ナップザックか何かを背負って、腰には手拭がぶら下がっている。このラフな格好、これぞ国際人である。

装幀家の友達と大いに安心したが、さて翌朝のホテルで出発の時間になってもロビーに現れない。三十分、四十分。待てど一向に出てこなくて、部屋に電話しても受話器をとらない。北京語の通訳と、少数民族語の通訳と、運転手の、三人の顔が変わっていく。ようやく現れた彼は「やあ、やあ。おはよう」なんて笑みを浮かべて手を上げるので、初日から通訳の機嫌は悪かった。

文章に苦しまないごとく、堀越画伯は絵も晴れ晴れと速筆である。新聞に連載した私の小説の挿画もとにかく早かった。それで雲南の旅の間にもスケッチブックを広げて苦しむなんてリアリズムはやらないのだ。絵描きは絵を描かずに、その横で取材旅の小説家はメモ帳を開いて、少数民族の女性の服装だの、熱帯の植物だの、景色だのを下手な鉛筆画でせっせと描き留めた。私はリアリズム人間なのでカメラは使わず自分の手を動かして描き写さないと、気がすまないのだ。

雲南の旅の間、毎朝、堀越千秋は遅れて「やあ、やあ」と手を振りながらやってきた。幸い用心棒の出番を願うような不測の事態も起きなかったが、いくつかのアクシデントに果敢に対応したのは彼ではなく、装幀家の女友達だった。何せ国際人は自由人で旅の頼りにはならないのだ。

堀越千秋よ、自由であれ。『赤土色のスペイン』の、ことに「雪舟と馬鹿野郎」の文章には泣き笑いした。朝の時間厳守を律儀に守り、仲間に迷惑をかけぬことばかりに汲々とするリアリズムの女作家など蹴飛ばして、この本の帯の文句にあるように「描き、書き、歌う日々！」を今後も継続してほしい。空を見上げたら、ああ、渡り鳥が飛んで行く。考えてみれば渡り鳥も国際人だよなあ。

（むらた・きよこ＝作家、福岡県中間市）

読書メーターより
ろまーなさん
横浜ジャズプロムナードのステージで巨大なライヴペインティングをする姿を毎年見てきた堀越さん、個展会場の画廊でこの本を購入。画家だけでなく、こんなにも多才な人とは知りませんでした。人生自体が素晴らしいアートであるなと。酔っぱらってハイになっている姿も知っていますが、思想的にもとても共感でき、尊敬すべき人でした。
もう何年になりましょうか、いつも横浜ジャズプロムナードで板橋文夫オーケストラのバックで巨大なライヴペインティングをしている姿を見てきた堀越さん、一昨年と今年はその打ち上げでご一緒させていただき、お話はできませんでしたがその魅力的な人柄に触れることができました。
…ということで、本を出されているのだから読めばいいんだと、個展が開かれていた銀座の画廊香月にて１冊購入。絵を買うのは経済的に難しいですが、絵もいっぱい掲載されている本ならば多少高くても大丈夫です。

さて、本の内容は数十年住み続けているスペインについてのエッセイが３分の２、残りは日本に来ている時のエッセイという構成でした。どちらも作者の生き方と周りの人との関係が刺激的です。
とにかく文章が味わい深くて人柄そのもの、生活体験としてのおもしろおかしい出来事が、感情豊かでユーモラスに物語られています。その中で、スペインに対して、また日本に対して、そこで出逢う人たちに対して、愛情を持ちながらも厳しい視線を投げ掛けている、それが知的であるとともに芸術家としての直観に依っているので、重く響いてくるのです。

本文もこの上なく面白かったですが、その内容に沿った絵も、画家としての観察眼とそれを自由に表現する心が素晴らしく、倍以上に楽しませてもらえる本でありました。

それにしても、こんなに多彩な分野で活躍をされている多才な方だったとは存じ上げず、毎年のステージ上でのお姿と抽象的な絵を茫漠と眺めていた自分を口惜しく思ってしまいました。また近々、別の本も手に入れて読みたいと思います。